COG2020ファイナリストと自治体の声集

2021年6月

COG事務局編集

COG2021に新たに参加検討したい方へのメッセージとして、COG2020のファイナリスト10チームと自治体有志からいただいたCOGへの参加経験に関する振り返りの集約版です

事務局でいただいたメッセージを北から順に拾ったもの
テニオハは事務局でそろえました

越前市の「学生チームとの協働」についてと題するスライドは、
本資料の最終ページにそのまま掲載しました

市民・学生チームの声（印象に残ったこと）

- チームづくり
- アイデアストーリー
- データ分析
- デザイン思考
- デジタル活用
- 応募取りまとめ
- 自治体との連携
- その他

チームづくり

- 役割分担を意識して組成
  - ファシリテーター（PM）、課題領域専門家、
  - プロトデザイナー
- 色々な視点を持った人がいると、多角的な面から意見が聞けて良い
- Excelのランダム関数でチーム結成した
- HAPPY実現は共通　アプローチ分野でチーム形成　目標をその都度確認
- 背景や所属が異なるメンバー構成だったので、お互いの重なる点、目的設定をすることに多くの時間を費やした。そこで共通の課題を導き出すことができた
- 玉名市が実施した「玉名未来づくり研究所」で構想した案を、具体的に実施したいと思える人々が集まった
- もともと始めていたフードドネーションのボランティアチームで参加した

アイデアストーリーづくり

- 目黒区担当課長達と、2019年10月12日大雨の時何が実際起きたのか、を聞くことができたことがカギに
- 自分の問題発見後に、とにかく、広く人々に意見を聞くことから始めた
- ブラジル人のために何かできないか
- 誰のどんなHAPPYを実現するか
  - 現状の把握→課題設定→解決策（案）
  - 解決策の実践（検証）→新課題
- モバイルオーダーシステムを普及させたいという出発点から、いかに簡単な方法で一部でも再現できないかというところを考えた
- 玉名未来づくり研究所でのアイデアを元にダイアログを開催
- 社会人の目線、冷静になった目線などで、新たな気づきがうまれた
- フードドネションのボランティアの活動経験からうまれた

データ分析

- 室蘭市の人口減少や交通状況などの統計的なデータで当初はアイデア出しをしていた
  - ただ住民（ユーザ）の困りごとは想像であった
- 目黒区担当課長からリアルな数字（避難者数）などを伝えてもらうことができたことがカギに
- 専門家ではないが、センサーを付けて数値をとる以外に、住民の感覚や意見なども、データとして意外と重要。有効に使える方法を知りたい
- ブラジル人の増加と災害の増加
- ＲＥＳＡＳ講習会・越前市ホームページ（オープンデータを含む）
- 京都市と連携しながらどのデータからどういうことが読み取れるかをディスカッションした
- Zoomでの打ち合わせ
- データ分析は非常に弱いところ　まずベースとなる考え方を、まとめた上で、いろんな文献やデータを見つけ、肉付けをしていった
- ローカルの新聞やネットから探索

デザイン思考

- 実際にヒアリングやフィールドワークをすることで実際の困りごとのポイントが明確になった 結果、アイデアに厚みがうまれ、ユーザを意識したアイデアとなった
- サービスユーザーは誰？という点から外れないことを重視
- 解決する課題を絞り、課題保有者（＝ユーザー）視点でプロトタイプ作成
- ある現象に対して、年代、立場が違うと、問題だと感じることが大きく違うことがある。もっと色々思いついたことを試せる社会になれば良いと思う
- 越前市役所で働く、ブラジル人職員の方へのインタビュー

現状の把握 視点を変える
理想を求める 諦めない
お互いに否定しない

- コロナ禍において人との距離に気を遣う一方、人とのつながりを求める普遍的な欲求について、うまくナビゲーションできるツールを開発しよう、という流れを考えた
- 他人の立場に立って物事を考えることは、すでにメンバーが多様であるために、自身の立場に立って話をしてもらうことで、他のメンバーの気づきになることがあった

デジタル活用

- GoogleFormという誰でも使えるクラウドサービスを利用した
- より広く、デジタル活用の可能性を感じてもらえるには、メリットをどう伝えていくかが重要　大きな目標を掲げるのではなく、身近な問題から提案していくのが良い思う
- オープンデータの活用
- とにかくやってみる
- デジタル活用ではRESASの活用やWEBミーティングを実施
- 意外にデジタル機器の使い方に個人差がある
- IT関係専門の方と実際にZOOMで意見交換した

応募取りまとめ

- ファシリテーターが自分の役割として率先対応
- 目黒区側の支援も非常にありがたかった
- わかりやすく、伝わりやすくするために、どこを捨てて、どこを拾うかを考えるのに時間がかかった
- イラスト付きロードマップの作成に尽力
- 書くことで、わかってくることがある
- 応募取りまとめは、メンバーがタタキ台を創り、それに不足している分、不必要な部分を対話によってまとめていった
- 期限ギリギリで応募を決めたので提出する資料を連日徹夜で仕上げた

自治体との連携

- ディスカッションの場を率先して調整くださった
- 関係する担当の課長様を庁内広く呼びかけてくださり、様々な視点から、目黒区側の推進に向けて乗り越えないといけない課題を共有いただけた
- スーパーシティへの応募、スマートシティ構想など、積極的に参加していた自治体だったので、前向きな話ができた
- 越前市5つの課と１０回以上の会議を開催しました
- 心配するより、まず問い合わせること
- アドバイスがもらえます（感謝！！）
- オンラインでのミーティングがほとんどで、効率的にすすめることができたと思う
- データ提供やディスカッションにご参加いただいた
- 活動場所が、なかなかないので、市役所の会議室を使わせてもらったりすることで、担当者とは連携を行っています
- 最初に自治休の方からCOGのオファーを頂き、応募からプレゼンまでサポートしてくださった

その他印象に残ったこと

- 消防組合・国際交流協会との連携
- 動画の作成・公開
- 看板・ステッカーの設置
- 失敗しても、それが次の課題になる　どんなショボいことでも、まずはチャレンジ（アクション）と実感

自治体有志の声（印象に残ったこと）

- 課題のエントリー
- 応募チームとの連携
- COGに取り組む意義
- 市民・学生にお願いしている3D
- その他

課題のエントリー

- 学生からのエントリーはとても新鮮で、アイデアの内容もとても勉強になった
- 抽象的な課題がＣＯＧの趣旨に適しているか不安だった（共生）
- 庁内から課題を提出してもらえるか当初は不安だったが，共生社会推進室の熱意ある応募に心強く思った（統計）
- コロナ過ということもあり、コロナ危機を乗り越えられる幅広いアイデアを応募可能とした
- ―昨年が応募者がおらず悲しい想いをしたので、今年度は、問題を根本的な問題に絞った
  - （良好なサードプレイスの運営）
- あとは、楽しんで考えてくれる人をどれだけ作れるかを考えていた
- ①コロナ渦により、初めて経験する時代の局面において、まちづくりのパートナーである市民との取組みが必須であると強く感じ、応募に至った
- ②InstagramやYouTube、ラジオや新聞で広報を行い、広く募集を呼びかけた
- ③オリジナルのおしゃれなイラストのCOG紹介カードを作成し、若い世代へCOG参加を呼びかけた

応募チームとの連携

- COG2020応募チームの方々とは和やかな雰囲気の中でさまざまな意見交換ができ、非常に有意義だった
- 今後も、引き続き、アイデアの実現に向け、応募チームの皆さんと連携を図っていく
- 未来を担う若い世代が、まちの課題を「ジブンゴト」として捉え、応募にまで一歩踏み出してくれたことが嬉しかった
- コロナで直接対面で議論するのが難しかったのですが，その反面，WEB会議等のデジタルテクノロジーのスキルアップにつながった（統計）
- アイデアの生成過程において、関連する施策や事業者アンケートの 結果を情報提供した
- 学内の中間発表会や成果発表会において、宇部市の取組みを紹介した
- 応募チームからは、かなり初期から接触があった
- 大学生とは、一緒にまち歩きをしたり、混合チームとは一緒にダイアログをしたりするなど連携を深めた
- お互いのタイミングを合わせることが難しかった
- ①応募チームの活動に職員がアドバイス役で参加した
- ②似た活動をしている市民活動団体とマッチングを行い、活動を見学することで応募チームのモチベーションアップにつながった
- ③オンライン上で他課やITの専門家との情報交換を行い、新たな視点を見出すきっかけになった
- ④チームと職員が何度も話し合いを重ね、ともに課題解決に向けた取組みを考えることができた

COGに取り組む意義

- 大学生として４年は生活する“まち”のことを知らないままで卒業していく
- 大学と連携して取り組むことで
  - “まち”のことを知る
  - “まち”について考える
  - “まち”のことを少しでも好きになってくれる
- まずは共創の前に
- 「共想（ともに“まち”を想って、想像して、アイデア発想する）」できる取り組みとしていきたい
- これが協働でのまちづくりを担う将来の市民につながるのではないか　以上は応募チームとの連携に通じる

- オープンデータを活用しながら、区民の方々と行政とで一緒に地域課題を解決していくことのきっかけとなった

- オープンガバナンスの取り組みのひとつ
- 市民と協働して地域の課題解決へつなげる取り組み
- 新規オープンデータの創出

- COGへの取組を通じ，改めて自らの取組に対する世間の反応を知ることが出来た（共生）
- データを活用して、自ら地域課題の解決に取り組む、地域で活躍するデジタル人材の育成につながる
- COGは、市民と行政との協働を行うプラットフォームだと思います。プロセスも含めて、我が事が地域全体の幸福に繋がるそんな場になっていると思う

- ①市民の取り組みに光を当てることができる
- ②市民の方が欲しい情報が把握できる
- ③市内各地域の問題解決につながる
- ④市民と行政が協働で課題解決に取り組むことができる
- ⑤行政の既存事業に市民のアイデアが活かされるきっかけができる
- ⑥行政に対する信頼度の向上
- ⑦遠くに感じていた著名な方と繋がることができ、視野や活動範囲が広がる

市民・学生にお願いしている3D

- 現在、 COG2020「未来減災課」の皆さま以外にはありませんが、今回のことを踏まえて、区民の方々との3Dを調査研究していく
- どんな生活、どんなまちにしていきたいか、市民目線だけではなく行政の想いも丁寧に汲み取ろうとしてくれた
- データ化しにくい内容かとは思うが，引き続き集積をお願いしたい（共生）
- 是非，デジタルを駆使（データ集積）いただいて，その方面からの活用や，オープンデータ化（公開）に向けた協力をいただけるとありがたい（統計）
- 必要なデータがあれば、まずは相談していただくようにしている
- ３Dに縛られると、アイデアが生まれないようなので、自由に対話することを勧めた
- ある程度考えがまとまった時点で、3Dによる肉付けを助言した
- ①ITの専門家とZOOMで交流し、課題解決のアイデアの糸口を見つけた
- ②オープンデータのより一層の推進を求められ、本市のオープンデータが十分でないことを実感した

その他

- アイディア実現に向けて、どうしたら皆が参加したくなるか、共感してもらえるか、という視点で常に考えている点が印象的でした
- とにかく、課題を楽しんで取り組める市民と、楽しんで連携をすることが重要だと思います
- 市民の方と楽しく協働でき、かつご自身の視野も広がるいい機会だと思いますぜひ頑張ってください！

「学生チームとの協働」について　…やってみて学んだこと

福井県越前市　川端清（前情報統計課長）

１特別なことはしない

既成の仕組みや取り組み
- 仁愛大学との連携協定
- 地域貢献活動支援補助金

２多様な関係をつなぐ

多面的で複層的な地域課題
関係課、関係団体、関係市民…

３可能性と実現性

満点でなくとも実現してみる
・でっかいかるた
・AED動画ほか

４課題は継続性

カギは指導者
COGの理念（バトン）をどうつなぐか！

四の五の言わず
東大に行け！

COGは
手段であり
目的ではない

自分の経験が元になっている情報は、やる気を生み出し『行動の原動力となる』

〔越前市＋学生チーム〕×COGのあゆみ

3年連続ファイナリスト、’18、‘20は学生賞

COG2017　・越前市から初参加
COG2018　・学生賞：仁愛大学
「創造的で懐かしく、多世代が共存できる場所ー『Third School』
COG2019　・ファイナリスト：仁愛大学
「でっかいかるたで大合戦」
COG2020　・学生賞：福井県立武生東高校
「Hino!Quest」
・ファイナリスト：仁愛大学
「増え続ける外国人、国籍関係なく助 け合うWell-Beingなまちづくり～リア ルとデジタルからの5つのアプローチ～」